

# 佳作

## 空への挑戦／二宮忠八

多摩市立北諏訪小学校 五年

平家 和志

「何がおもしろいの？」

ぼくが、自分で作ったパラシュートを上に飛ばしている時、友だちがばかにしてきた。

「パラシュートが空気をつかまえてふくらむ事で、空気がそこにあることを感じられて、とても楽しいじやないか。」

二宮忠八が生まれたのは、一八六六（慶應二）年六月九日、伊予国宇和郡八幡浜浦矢野町四四（今の愛媛県八幡浜市矢野町五丁目）で、お父さんの実家の近くだ。徒步2分ぐらいの所に高さ一mぐらいの石柱があつた。そこには、「二宮忠八翁生誕之地 世界に先駆け飛行器を考案した人 生誕百二十周年記念建之」と書いてある。とても近い場所にあつてびっくりした。これを調べるまで、まったく石柱に気がつかなかつたからだ。

見えない空気が感じられる、見えない物がそこにあると知ることは、ぼくにとつてとてもおもしろい事である。

飛行機の浮力も、空氣があることによつて生まれるのだ。飛行機の世界では、浮力のことを揚力と言う。

今、飛行機は普通に世界中の空を飛んでいるが、人が空を自由に飛ぶことが、夢物語と思われていた時代があつた。だが、夢を実現させようとがんばり、自然観察から、独学で飛行の原理を発見した男が、明治の日本にいた。二宮忠八である。ライト兄弟よりも昔に、有人動力飛行を実現させようとしていた。

二宮忠八が生まれたのは、一八六六（慶應二）年六月九日、伊予国宇和郡八幡浜浦矢野町四四（今の愛媛県八幡浜市矢野町五丁目）で、お父さんの実家の近くだ。徒步2分ぐらいの所に高さ一mぐらいの石柱があつた。そこには、「二宮忠八翁生誕之地 世界に先駆け飛行器を考案した人 生誕百二十周年記念建之」と書いてある。とても近い場所にあつてびっくりした。これを調べるまで、まったく石柱に気がつかなかつたからだ。

石柱の前を通ると、忠八もこの場所を歩いたと思つて、とてもワクワクした。ぼくが初もうでに行く八幡神社も、

第9回  
△子どもノフィクション文学賞〇

忠八の遊び場だったそうだ。石柱は、銀座商店街のアーケードの中にある。今はシャツターハンガーだが、「八幡浜市誌」の写真を見ると、明治時代のこの場所は、大繁盛していた。そんな場所で、忠八の家は海産物問屋「大二屋」という店を出していた。ぼくはおどろいた。こんなに繁盛していたのに、シャツターハンガーになるなんて。

十二歳で父・幸蔵を亡くした忠八は、奉公に出る。呉服屋の子守りや写真館で働きながら、いろいろな工夫がある。「忠八凧」を作る。こうもりや、目の色が変わるだるま、トビなどの形をしている凧を、明治橋で揚げると、町にいる人たちが凧を近くで見ようと集まってくるほど評判ぶりだ。飛ぶように売れたそうだ。これで学費を稼いだ。

今度は薬種商を営む叔父の家で働き、家にあった、物理化学や薬の本に興味を持ち、勉強をした。ぼくだったら、仕事だけして、勉強はせつたいにやりません。忠八は、中学校に行つていないので、と思つてびっくりした。この頃、八幡浜港に蒸気船が来た。推進力が気になつ

た忠八は、小舟で近くまで見に行き、竹とんぼに似ていることに気がついたそうだ。それが後に、飛行器のプロペラになる。忠八は、飛ぶ機械を、「飛行器」と名づけた。八幡浜で測量・製図の仕事をした。この仕事をした経験は、設計図に役立ったと思う。

一八八七（明治二〇）年に香川県丸亀の、陸軍歩兵第十二連隊に看護卒として入隊した。叔父の家の薬の勉強が役に立つたのだろう。

その二年後の十一月九日、二三歳の時、香川県の樅ノ木峠で昼食後に、にぎり飯の残りをねらい、カラスが羽をはばたかずに、羽を動かさずに、すべり落ちるように滑空したのを見た。『飛行の原理』の発見である。固定翼で飛べることを思いついたのだ。一年半後、忠八はカラス型模型飛行器の飛行に成功した。一八九一（明治二十四）年の四月二十九日のことだった。

ぼくは、この模型飛行器を、八幡浜市民図書館郷土資料室で見ることができた。しかも、忠八が作った本物だ。ケロッとしている目がかわいい。動力は、看護卒だから

こそできた、古くてもう使わない聴診器のゴム管なのだ。

ばくだったらこの発想は生まれないだろう。

この年の六月に、軍時代の友人の妹の深見寿世と結婚した。

忠八は、<sup>※6</sup>結婚前には秘密にしていた飛行器のことを寿世に話した。ばかりかしいと思われて、きらわれるのがいやだったのだろう。でも寿世は、飛行器のことを探して、造ろうとする忠八を全面的に支えた。

研究の結果、カラス型では人の体重を支えられない。そこで、カブトムシや玉虫、セミなど、飛ぶ昆虫の観察し、甲虫の羽が二段になっていて、かたい羽が揚力、やわらかい羽が推進力になっていることに気がついた。

ぼくは、NHKのアニメ「ピカイア」を見て、生き物の特長を応用することだ。

一八九三（明治二六）年十月五日に玉虫型模型飛行器の $\frac{1}{6}$ モデルを忠八は完成させた。この時、ライト兄弟の有人動力飛行の研究はまだ始まっていない。彼らが飛

ばしたのは十年後のことだ。

一八九四（明治二七）年に、日清戦争が始まった。忠八は、ソウルの郊外へ出征した。

忠八は、エンジンがほしかった。動力が人力や、ねじつたゴムでは、パワーが不足することが分かつていたからだ。だが、石油発動機は高く、個人のお金では買えないかった。

そこで、軍に飛行器を採用してもらつて、エンジンを手に入れようと思い、設計図を付けた上申書を、大島旅團長に提出したが、即日却下された。その後も別の人たちに上申書を提出したが、全て却下された。

香川県の二宮忠八飛行館の展示によると、その時の忠八の思いを記した文章が残っている。「架空の妄想者として排斥せられ一人も耳傾けるものなきに至れり其然ゆゑんからん所以は身分軽きために信用せられざるに因る若かす資力と身分を造り獨力完成して以て國に報いる事に決心せり」というものだ。

却下の理由は、「飛ぶかどうかもわからないものに検

第9回  
△子供ノパイク・ショウ文学賞○

討の余地はない」「外国でも聞いたことがない」というものだつたそうだ。ぼくも同じような理由で却下されたことがある。学級会で、目新しい意見を言うと、これまでにあつたような意見をみんなは選ぶ。忠ハのくやしさはよくわかる。ぼくだったら、この役に立たない軍のせいにする。だが、忠ハは身分の軽い自分のせいにした。お金は自分で貯めるため、軍を退役して、忠ハは大阪製薬株式会社に入社した。三二歳の時だつた。忠ハは飛行器研究を中断した。

<sup>※4</sup> 軍隊からの使えない人材はいらぬと思われていて、いつでもやめさせられる契約で、とても安い給料でやどわれていたそうだ。でも、経理の知識とアイデアで、半年後には正社員と同じになり、一九〇八（明治四一）年合併した、大日本製薬株式会社試験部支配人になつた。給料は一〇〇円になつた。ぼくは、これつてすごいことか大人に聞いた。とてもすごいと言つていた。<sup>※5</sup> お米一〇kg一円だ。

飛行器の話にもどる。一九〇一（明治三四）年には飛

行器の研究を再開している。故郷の八幡浜に似た名前の、京都府八幡町土井にある精米所を、二宮工作所として買つた。精米所を買つた理由は、木津川の川原が飛行器の実験場にちょうど良いことに気がつき、それに、精米所にある石油発動機も買えたからだ。しかし、その発動機は二馬力だつた。本当は十二馬力がほしかつた。全然パワーがない。

一九〇三（明治三六）年十二月十七日に、ライト兄弟が有人動力飛行に成功した。ライト・フライヤー号で、十二秒間、約三十メートルの初飛行だつた。その頃忠ハは、毎日玉虫型飛行器を組み立て、ほぼ完成していた。あとエンジンだけだ。一九〇九（明治四二）年、忠ハの目に、信じられない文字が見えた。朝刊に、ライト兄弟が初飛行したニュースがのつていたのだ。日記には、「がつかりした」「みんな壊した」と書いてあるそうだ。そして、忠ハは一切の飛行器研究をやめてしまつた。

一九一九（大正八）年に愛媛出身の白川義則<sup>よじのり</sup>に会つた時、忠ハは上申書の事を話した。

明治の末には、飛行機が輸入され、飛行機ブームになつていた。こんなすごいものが明治二七年に…と思つたのだろう。忠八の設計図は、雑誌「帝国飛行」五号四巻にのつた。

長岡外史は、スキーと航空の父と言われている。彼も上申書を却下したんだ。間ちがいを認める性格で、忠八の記事を読んだ長岡外史は、「帝国飛行」十一月号に詫び文をのせ、実際に会つて謝つたそうだ。八幡浜市民図書館で写真を見た時、ヒゲが長いことにびっくりした。中にじくでも入れてあるのかと思つた。ググると、「長岡外史 ヒゲ」と「長岡外史 ガンダム」と関連ワードが表示される。「長岡外史」と入れただけでおもしろい。

忠八は、人生で一度だけ、飛行機に乗つたことがある。

その感想は、<sup>※3</sup>「若い頃、毎晩飛行器に乗る夢を見た。今、初めて飛んだ気持ちは、夢で見たのと少しも違わなかつた」というものだ。ぼくは、自分のやりたいことがあるなら、やりきることが大事だと思う。忠八も完成させていれば未来が変わつたと思う。

ぼくは、相手にされなくともがんばる忠八が、かつこいいと思つた。タケコブターを作ろうとしている人も、ばかりにしてはいけない。名古屋の「株式会社プロドローニ」という会社が、なんでもドローンを開発した。運ぶ物に取り付けると、運ぶ物自体がドローンになる。この会社では、人が乗れるドローンも開発中だ。世の中、ばかりにする人がいても、成功することもあるのだ。忠八は、ばかりにする人がいっぱいいても、開発をがんばつた。ぼくも、パラシユートで、一時間ぐらい観光できるぐらいゆっくり落ちるものが作りたいと思う。気球よりもちつちやく出来そうだ。

第9回

## △子どもノフィクション文学賞〇

### 参考資料

#### （伝記・図書）

○玉虫とんだ 管原 千夏 講談社  
○凧と飛行機 豊沢 豊雄 偕成社  
○その時歴史が動いた⑫

NHK取材班 KTC中央出版※6

※2

○八幡浜市誌※1

○国土交通白書二〇十七

○値段の明治、大正、昭和風俗史※5

朝日新聞社

#### （博物館・資料館）

○二宮忠八飛行館※3

○八幡浜市民図書館郷土資料室

#### （インターネット）

○飛行神社ホームページ

○飛行神社 岩本 太郎

2013龍谷理工ジャーナル25-2  
※4